

白選送五十一首



志垣澄幸

しがき・すみゆき 1934年、台北市生まれ。歌集に『空塚のある風景』『鶴の説』『夏の記憶』『山河』など。評論集に『歌と海』がある。「原型」同人、日本文芸家協会会員、西日本新聞短歌月評者。宮崎第一高等学校副校長。

空塚が立ちおよぐ海の昏れがたにわれの心のさだまりがたき

逆さまに振られし塚の乳液が底に還らむと幾筋も垂る

音楽は聞こえざれども三階の窓に拍子をとる少女みゆ

社務所の屋根にのびたる夏草も地にあるもののごとく枯れゐる

煙突の尖まで架かる鉄梯子わが逃亡の日のために恋ふ

透明をあまた重ねて積みゆけばガラスは海のごとき色もつ

店頭が卵が孵りゆく不安動くともなく移る陽ざしに

浜砂に打ちあげられし紅き藻がしばらく照りて海に還れり

折り返すマラソン走者のおほきなる呼吸がわれの呼吸こえゆく

一瞬の笑み撮られる若き日の母は見知らぬ人とならべる

告白をしひられてゐるわが前にずぶぬれの鶏瘦せて寄りくる

『空塚のある風景』

第一歌集『空塚のある風景』は、一九七七年（昭和五十二年）、反措定叢書七冊中の一冊として出版したもの。歌集のタイトルから選歌に至るまで、福島泰樹、三枝昂之、富士田元彦ら各氏の手をわずらわせてしまった。また解説を篠弘氏にお願ひするなど、多くの人の手を経て出来た歌集なので、私にとっては当然のことであるが、やはり愛着のある歌集である。

私が作歌をはじめた頃は、塚本邦雄、岡井隆、寺山修司をはじめ、前衛短歌の作品と理論がようやく広がりをみせはじめた時代であって、その影響を大いに受けていた。皮相な日常詠だけは詠むまいという意識をもって作歌したが、私の場合、対象をどう捉えるかと

くもりたる窓拭きてゐる手がみえて夜の踏切りを列車過ぎゆく
燃えさかる野火の炎を生けるもの捕らふごとく人囲みをしり

「桜闇」

あけぐれの厨房に家族うからの敷だけの卵割られてゆく音がする

つらぬきて寂しきものをペリカンは蒼き海面にみなささりゆく

猛獣に仔を喰はれるる編馬が傍へにたちてゐしが去りたり

転生のならば修行僧がよし冬滝に身をそぐほどの紅

「鶴の説」

為すことも為さざることも一生にて地には花々空に光満つ

花びらの吹雪ける下にならびる血縁といふはさびし墓石も

車の輪逆にめぐれる西部劇見終えて雪の街にたちゆく

わが齡までかぞへたる石の段なほのぼりつめ一生越えたり

韻律のそよぎとどめし草の上ほろびはじめし光に対ふ

北風に吹かれて歩む鶴一羽母にあらずやわれに近づく

透きとほる稚魚のいのちはまぎれつつ夜の水槽に眼のみ群なす

「星霜」

繁りたる樹木のごときカリフラワー食べしゆふべは木霊とならむ

檻のあるバスに乗りこみ人々が猛獣の園を運ばれてゆく

丘にたつ一本ゆゑにひもすがら蟬こもらせて櫂の木は啼く

壮年のころひらけばフォークナー読むに葉月のよき木下蔭

人けなき体育館に籠球の底の抜けたる網さがりある

声ひとつ洩れぬ獄舎の扉に沿ひ炎天の道歩みてきたり

「夏の記憶」

構内に入り乱れたるレールよりのびしひとつが夜の闇に消ゆ

いう表現の面、具象に腐心していたように思う。いわばこのリアリズムへの思いが私の作歌の基本として、以後の歌集にもつながっているように思う。

ただ、テーマについてみると、第七歌集「遊子」あたりから日向（宮崎県）の自然を意識して詠むようになった。日向は外地から引き揚げてきた母の里であり、その緑豊かな自然も、最近では少しずつ破壊がひろがっている。少年期に渉り歩いた自然への郷愁と、緑の消えてゆく無念さが自然を詠む動機にもなっている。もちろん、年齢による感傷のせいもある。

もう一つは、古いへの意識である。人生における老いと、その先にある死は、生きていく上での未知なる体験である。それに対してつよい好奇の心が湧くし、興味津々なのである。老いこそまさに今の私の最大の関心事であり、テーマである。

〈明日への思いをもつとき、過去への時間を溯源するのはきわめて当然のことであろう。そして……やがて遇うであろう未知なる時間をいましみじみと想っている〉と「山河」のあとがきに書いたが、過去は未来を考える上で大切な事である。ただ過去を詠めということではない。未来を、今を詠むために過去に習えということである。

「サイタサイタクラガサイタ」と唱へたるわがよみかきのくらきはじまり

昼顔の咲く塀沿ひに少年は自転車のリム光らせて過ぐ

迂闊にも齡重ねてしまひけりひぐれは枇杷も黄金の玉

つぎつぎにうからの帰ってくるゆふべ新聞読みるてあと一人と思ふ

震源のあたりか遠く照りながら月光落ちてゐる日向灘

折りふしに屋根のむかうにあらはれて鯉のしつぽがはためきてをり

けふわれはかなしき遊子はるか来て天平仏の指に触れたり

腸詰のやうなる雲が累々とわれの脳なづきの上に混みあふ

父母の墓われを見つけてかがやけりあまたの墓をかき分けくれば

逝きしままたれも還りてこぬ地上夕のひかりが野の面に充つ

「遊子」

春海の風ぎてのたりとせる面おもがをりをり白き舌出してゐる

自転車で遊べる女童けふの日を五十年後によき時代と思はむ

伐られたる孟宗竹が横たはるこの重さにて空にそよぎゐし

雨やみし路地裏ゆけば器なすものみな水をたたへてゐたり

雨霽れてひとときは白き鷺の群脚を抜きつつ泥田を歩む

われの世の前半はいくさ後半は寥々として父母恋し

日輪も月も上げ終へし日向灘しばらく紺青の色湛へゐる

ちぎれむばかり大揺れの乳房走りゆく高二女子らの百米競走

月いでて遙かに海のあらはるる灯一つなき闇の中より

「山河」